# かも市史だより

平成16年10月
No.10

■編集発行　加茂市幸町2丁目3番5号　加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480


# 後須田諏訪神社の神楽舞

▲　めんをつけ、竹幣を持って舞う「宮清の舞」

▲　仮面をつけずに舞う「地割の舞」

▲　舞のあと菓子を観衆にまく「大黒の舞」

後須田諏訪神社の春祭りは毎年四月二十九日（かつては二十七日）に行われています。祭りで村びとたちが楽しみにしている催しが神楽舞の奉納演舞です。神楽には色々な種類がありますが、後須田の神楽は『古事記』等の神話を黙劇風に演じる神事芸能で、一般に太々神楽とか太夫舞などと呼ばれています。

太夫舞は、舞人が神に扮し、幣・振鈴・扇・剣など（採り物という）を持って舞うので、「採り物神楽」とも言われ、出雲流神楽の系統となるものです。県内では、長岡・見附・三条等の地域の神社に伝承されている例が多く、後須田の神楽舞も、これらの地域の神楽舞に共通していますが、異なる一面もみられます。その一例をあげますと、後須田には仮面をつけずに舞う「地割」「群雲」という舞がありますが、三条神楽（県無形文化財）にはないものです。

後須田神楽の歴史等は不詳ですが、口碑では二百年ほどの伝統があると言われていますので、中越地方の出雲流神楽の影響だけでなく、独自の創意伝承も考えられます。

（民俗部会 五十嵐 稔）

# 政党が争奪した木工試験場

新潟県木工試験場（現工業技術センター加茂試験場）は昭和三年に開かれて以来、業界の技術向上に貢献してきました。ここでは、設立当時の、政党がらみの事情を探ってみました。

**新潟県木工試験場沿革**

| 年　月 | 出　来　事 |
|---|---|
| 大正15年12月 | 県会にて加茂町に木材利用研究所設置を議決 |
| 昭和３年１月 | 新潟県加茂木工作業所と改称 |
| 昭和３年５月 | 事業開始 |
| 昭和４年11月 | 新潟市に新潟県木工試験場本場が開場したことに伴い、新潟県木工試験場加茂支所と改称 |
| 昭和18年４月 | 新潟市の本場類焼 |
| 昭和22年８月 | 新潟市の本場復旧容易ならず、県会にて本場の廃止及び加茂支所の拡充・昇格を決議 |
| 昭和23年４月 | 新潟市の本場廃止、加茂支所を新潟県木工試験場と改称 |

## 設立前史

『加茂のタテグ』を著した刈田道夫（元加茂建具協同組合理事）は、箪笥・建具を中心とした加茂の木工業は、木材の産地を背景として、職人たちが技術を磨いて築き上げた産業であったと説いています。

第一次大戦（大正三年＝一九一四～同七年）後、産業界に不景気が到来し、新潟県でも特色のある産業を積極的に育てることが課題になってきました。こうした中で、新潟県山林会は、本県の一大産物である木材の多くが原材料のまま移出されている現状を変えるために、加工技術の研究機関が必要であるとして、大正十三年十二月、木工試験所設立の要望書を県知事に提出しました。

県会でもこれを実現させようとする動きが政友会の高野宏策議員等から起こり、県立木工試験場設立の建議が満場一致で承認されました。更に、加茂出身の田下政治議員は、大正十二年に初当選し党派はまだ中立でしたが、加茂の木工産業を育てるために、木工試験場を加茂に誘致しようと運動しました。大正十五年（昭和元年＝一九二六）十二月、県は田下議員の建議を取り入れ加茂に木材利用研究所を設置する方針を示し、予算を上程しました。議案は承認され、加茂町の負担による一千坪の用地提供で、同研究所の建設が始まりました。

翌昭和二年九月の県会議員改選で、田下政治は政友会と対抗する民政党に所属し再選されました。その十二月の県会で、県は加茂の木材利用研究所を加茂木工試験場と改め、規模拡張をはかり、経常費一万六二三三円に臨時費五〇〇〇円を加えた予算を計上しました。田下議員の働きかけによるものだったと見られます。

▲　**県会議長当時の田下政治**（前列右から４人目、昭和15年頃）田下は加茂町収入役・県会議員・衆議員議員を歴任、町政の発展に尽力した

## 政友会の画策と木工試験場

しかしこの審議の前に、新潟市出身の渡邊熊三郎（中立）外四名の議員が、新潟市に建設費全額を市が負担するという木工試験場設置の意見書を提出し、承認されました。

一方、加茂木工試験場の予算は勧業費の委員会で審議され、委員長平沢与之助（政友会）がその結果を次のように報告しました。

新潟市に木工試験場を設置する建議が可決されたのであるから、加茂の試験場は予算を縮小すべきである。経常費を八三四八円に修正し、臨時費は全額削除と決した。議場はいっぺんに緊張しました。

## 二大党派の政争と田下政治

民政党は、加茂の試験場はすでに

昭和26年頃の木工試験場

機械の設置も終わり、県も、単なる試験場でなく、作業本位の場所に構想を拡げて提案したものだから、ここで計画を大幅に縮小することは理由がなく、この修正案は全く党利党略によるものと反対し、政友会は新潟こそ将来性から見ても、交通経済の関係からも最適地と賛成を主張し、紛糾しました。

ここで、政友会の強圧に立ち向かう焦点の人田下議員が登壇、議場は騒然となりました。田下が述べたことは、自分は加茂の試験場が「（加茂地方の）木材ノ利用、並ニ優良職工ヲ得ルト云フ重大ナル目的」のために設置せらることを藤沼知事が認識しておられることに敬服しており、委員会の決議はその「重大使命ヲ阻止シ、産業ノ発展ヲ阻止スル」もので、もしこれが通れば県の信用さえ失われる、ということでした。

しかし、結果は修正案が多数で可決されました。因みに、先の改選で政友会は二五名、民政党は一八名の議席を得、政友会が優勢の時代でした。また、新潟市と加茂町の木工業の生産額（昭和元年）は一一九万六四〇〇円対一一九万三〇〇〇円で、相拮抗していました。

## 木工作業所から木工試験場加茂支所へ

さて、こうして加茂の試験場が拡張を抑えられた一方で、新潟市に新設される木工試験場は急速にその計画が進められました。昭和三年一月八日の「新潟新聞」は次のようなことを伝えています。

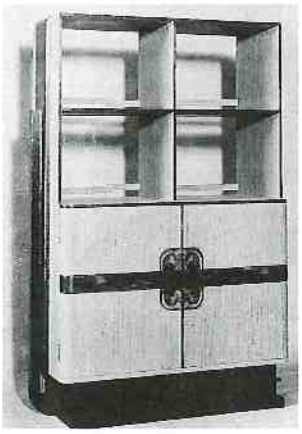
県は新潟市に木工試験場を新設することとし、その総経費七万五〇一七円を新潟市の寄附によって三年度の追加予算に計上すること、及びこれに関連して、加茂に設置された木工試験場は木工作業所として存置することになった。

この大きな転換について、新潟新聞は「非常に急いだ措置で、総選挙（二月二十日実施）を前に政友会が自派に有利な情勢をつくり出すために県当局と結託して進めたもので、新潟市もこれを好機ととらえて決めたのである」と解説しています。

加茂木工作業所の名称は昭和四年に県立木工試験場加茂支所となりましたが、木工業者の相談を受け、機械を試用して技術の研究をしたり、木工品の注文を受け製品の販売もしました。何れにしても昭和時代の加茂の木工業はこの試験場が大きく貢献し、県下の中心地となっていきます（典拠は『新潟県議会史』等）。

（近現代部会　大塚　哲）

▶ **田下政治胸像**　死後十年を経た昭和三十八年に、遺徳を偲んだ有志により造立されたもの


▼ **木工試験場製作の品々**（写真はいずれも工業技術センター加茂試験場所蔵）　右から飾り棚（昭和十二年）、応接セット（昭和二十四年）、麻雀セット（昭和二十五年頃）

# かも私史

## 服装学院の立上げから

駅前 蒲沢フサ

私は加茂に育って今八十の齢を過ぎていますが、加茂で洋装学院を開いた頃のことなど、乞われるまま記してみたいと思います。

私の婚約者服部堅三が、昭和十九年六月二十七日、東京第三陸軍病院（現相模原市）にて、半年間の看病の甲斐もなく戦病死したのはまったく無念の限りでした。そんな傷心の中、当時家庭にいる人は徴用制度の時代であったので、同十九年八月のお盆過ぎから、町役場の愛国婦人会・国防婦人会の係として、終戦の二十年八月十五日まで一年間勤務しました。

終戦の混乱の中、今後の一生の仕事として、洋裁の技術を身につけるため、その秋から新潟の洋裁学校に通いました。その甲斐あって、二年後、教師としてその学校に勤務することになりました。ところが昭和二十三年五月、ただ一人の兄、蒲沢栄一（昭和十九年六月十五日応召）がレイテ島で玉砕・戦死との公報があり、加茂に帰ることになり、新潟の洋裁学校を退職しました。

それから加茂でなんとか服装学校を開きたいと、昭和二十三年九月、住宅の部屋の三間を使って、「蒲沢服装研究所」として開校しました。当時の生徒数は一六名でした。さらに昭和二十六年に新潟県知事の認可を受けることができました。そして昭和二十八年十月に校名を「蒲沢服装学院」と改名しました。当時の授業は、洋服・和裁の服装科として、昼間部（午前九時～午後三時半）と夜間部（午後六時～九時）の二部制を取っていました。また授業課程は一般と専門の二課程があり、修業年限も一般の昼間部は一年から三年、同夜間部も一年から三年、専門の昼間部は二年、同夜間部は三年でした。入学時期は各課程とも毎年四月あるいは十月の二回でした。

この時代、まだ中学卒業生も多く、その方たちは一般課程で入学され、高校を卒業の人は専門課程で学ばれました。この頃、社会的にも「習い物の風」が大いにあって、生徒の構成も農家や商家、サラリーマンの子女など様々でした。多い時で生徒数

▶ 生徒による作品展（昭和四十五年）

## 終戦後の加茂経済

終戦直後の加茂経済・生活状況をみると、人々は「ドン底」生活にあり、味噌屋へ「桶を洗った水さえも調味料不足の人々が貰いに来た」ほどの窮迫下にあった。織物業では一時的な「ガチャ万景気」も生じたが、長続きしなかったといわれる。皆が生活苦に喘いだ時代であった。

昭和二十五年の朝鮮戦争頃から経済は急速な回復を示す。中心街では念願の舗装化が進み、街路灯も設置されるとともに、販売商品の種類・質も次第に向上する。そして三十年代に入ると高度経済成長時代に突入、全体的に好調な動きを示す。未だ不十分な点はありながらも、人々は将来に夢を託すことができるようになった。未来への展望を持ち難い現在とは異なる「古き良き時代」であったといえよう。

（近現代部会 前田 穣）

### 学校法人蒲沢学園讃歌

作詩 横山旭三郎
作曲 片桐八重
補作 片桐要一

一
明るい笑顔が　和み合い
暮しの文化を　高めつつ
豊かな明日を　築く庭
平和の花園　蒲沢学園

二
加茂の流れの　水清く
み山の杉は　天をさす
いそしむ道は　ひとすじに
文化の花園　蒲沢学園

三
学びの歴史を　育くみて
勉めて止まぬ　若人が
もろ手を挙げて　誇らかに
和協の花園　蒲沢学園

は二四〇名位でした。

こうして私が服装学院のことに専心できたのも、母（ハル）が元気で内方、ことに家庭のことは一切を切り盛りしていたお陰でした。

衣服の既製品化など、時代とともに服装学院は生徒数が年々減って来まして、健康で勤めて参りましたが、平成十六年三月をもって学院は閉校しました。

（大正八年七月二十六日生）

▲ **服装学院閉校時の外観**（校名は昭和五十一年に蒲沢服装専門学校と改称）

# 川砂採取 五十年の軌跡

千刈一丁目
玉木 孝

私は農家の五男に生まれました。まだ私が九歳か十歳だった大東亜戦争真っ只中の昭和十七年頃、父親が病に倒れ手足が利かなくなりました。そこで学校から帰ると田んぼや畑の草取りなどをさせられた覚えがあります。やがて終戦となりました。今と違って物のない時代でした。

ある時加茂の土建会社に馬車を曳いて資材運搬に行きました。そこで社長さんから「お前は信濃川の近くに居るのだから、土木用の川の砂上げをやらないか」と勧められたのが昭和二十六、七年頃だったと思います。砂採りには船を始め道具が必要で、いろいろ揃え出しました。船に乗ったこともない私は、最初船の櫓を漕ぐのに一苦労でした。それから船に砂を積むようになりました。直径一〇㌢程の錨で船を繋ぎ、じょりんという道具で砂を掻き揚げるのです。砂を船に積んだら船着場へ行きます。今度は人力で、スコップを用いて砂を跳ね上げる重労働でした。午前一回午後一回の一日二回、その砂を土建現場へ馬車で運ぶのです。でも次第に需要が増えてとても馬車では間に合わず、昭和二十九年頃中古三輪車を買いました。更に砂採取機を買い、鉄船を造船所で造り、ベルトコンベアーを購入し次々に機械を揃えました。車も二台増やし、最後はダンプ五台にまで増車しました。

▼ **信濃川での川砂採り**（昭和三十九年九月）奥に見える機械は昭和三十五年頃導入したが需要に追いつかず、その後さらに大型化していった

一年中外作業でした。雨の日も風の日も船を出して砂採取に励みました。一番恐ろしかったのは採取中に突風に遭うことでした。昔から船頭は風を嫌うと聞いたことがありました。風は本当に嫌なものです。

この業務をするには砂採取の業務主、船の海技の免状など様々な資格が必要です。また、いつも天候が良ければいいのですが、雨交じりの風にあたったり、初冬の季節になるとみぞれ雪また吹雪になることもしばしばありました。でもその季節が終わると、遂に待ちに待った春がきます。来る年も来る年もその繰り返しの人生でした。寒いから仕事をやめようとか、苦しいから辛いからとか、それは人様から見れば大変だと思われたでしょうが良くしたものです。自分はとにかくその仕事でなければならないと思い続けてきました。この五十年間、振り返ってみるとすぐ昨日のことのように思います。

（昭和七年四月十八日生）

▲ **加茂川での川砂利採り**（昭和20年代）川砂利も川砂同様人力で採取し、川砂及びセメントと調合され建築材としてのコンクリートになった（本間 正氏所蔵）

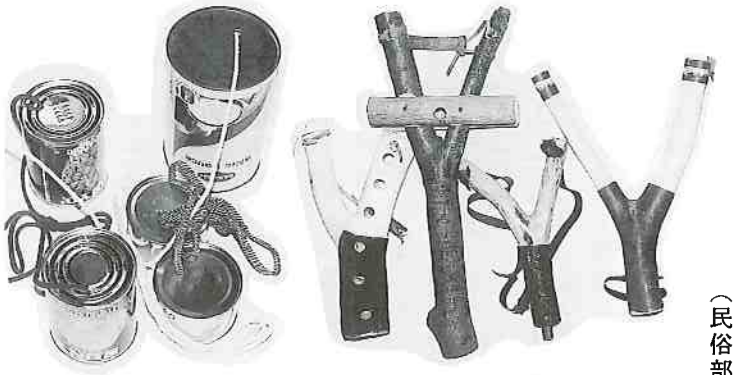
# 探しています

調査を重ねて生まれた疑問・質問を並べました。どんな些細な情報でも結構です。お心当たりの方は市史編さん室まで御一報ください。

## 古写真はありませんか

◆ 携帯電話やテレビゲームがなかった頃の、子供達が遊んでいる様子を知りたいと思っています。どこかに写真が残っていませんか。

（民俗部会）



▲ **昔ながらの遊び道具** パチンコ（右）とかんぽっくり（田村喜徳氏作、民俗資料館所蔵）

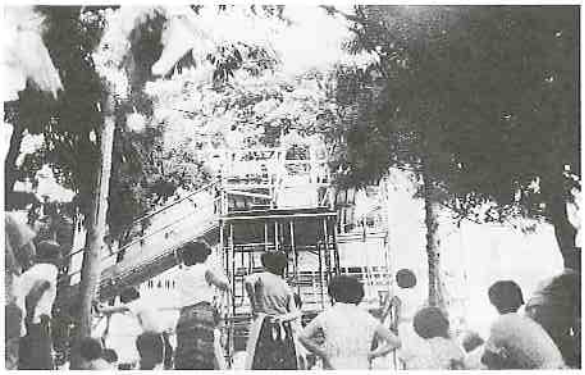
## 語り部募集中

◆ 旧加茂町の国民健康保険は、任意加入制で昭和十七年にいったんは発足したものの、経営難から二十四年には休止し、再起動は町村合併後の三十年十一月まで待たねばなりませんでした。この国保空白期にあたる昭和二十年代の後半に、病気療養がどう行われたか知りたいと思っています。どなたか経験をお聞かせ願えませんか。

（近現代部会）

◆ 作業前のお祓いや整地後の地鎮祭、棟上時の建て前など、家造りの節目には建築儀礼が伴います。家や地域、また時代により微妙に異なるこの習俗についての経験を話していただけませんか。

（民俗部会）



▲ **神明町神明宮の上棟式**（昭和56年8月4日、横山克成氏所蔵）

## 加茂町・下条村・須田村の道路元標はどこですか

◆ 写真は、現在七谷小学校の校庭、二宮金次郎像の傍らにあります、「七谷村道路元標」です。かつて黒水の岩野橋南詰めに据えられていたものですが、道路拡張などで現在地に移っています。

道路元標は大正八年の旧道路法の施行により、全国の各市町村で設置された石造製の標石です。

加茂町は、宮大門北側の当時の「山崎キャンデー屋」の角に、下条村は小橋の「五幣床屋」の角に据えられていました。須田村は須田村役場前にありましたが、現在は所在地不明です。

道路工事のたびに「邪魔者」扱いにされた道路元標ですが、各町村間の里程のもととなる貴重な歴史資料です。

◀ **七谷村（右）と田上村の道路元標**

## 編集後記

より有益な情報の提供をめざし、今号から増ページするなど紙面をリニューアルしましたが如何だったでしょうか。今年度末にはいよいよ加茂市史資料編の刊行が始まります。御期待ください。

（事務局）

**急告**

**加茂市史資料編 1**
**古代・中世**

**平成17年3月**
**発刊**

**～目次より～**

- 青海郷から青海荘へ
- 戦乱の世
- 天下統一と検地

**A5版 約360ページ**